



進修同窓会 HP にアクセス

雪の筑波五軒茶屋の一夜

土中生たちは、開校早々から夏休みや修学旅行で筑波山に登っていますが、1902〔明治35〕年1月には、国語科の石川重房先生と4年生(中2回)24名が、真冬の筑波登山を強行しています。中学2年生の時に「筑波紀行」(本紙第167・168号に掲載)を著した山口鼎太郎(中2回)は、在校生の求めに応じて、1927〔昭和2〕年9月発行『進修第26号』『先輩諸氏より』に「雪の筑波五軒茶屋の一夜」と題して、その思い出を綴っています。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。また、筑波山登山ルートは、進修同窓会HPの『月刊Acanthus』第169号3頁に掲載しています。

雪の筑波五軒茶屋の一夜

賛助会員(注2) 山口鼎太郎【1903年3月卒業】

「筑波山頂に一晩寝て来やうぢやないか。」

豪放磊落【ごうほうらいらく】で酒好きの石川重房先生【在職1899〔明治32〕年12月〜1907〔明治40〕年4月】は老体ではあるが、元気な口調で受持の四年級から同士を募つた。痛快だとあつて忽ち同勢廿四人、この次の土曜に早速断行と衆議一決した。

正月休みも終へた【1902〔明治35〕年】一月中旬のこと、名山筑波は今しも雪を頂いて如何にも寒むさうだ。『穴でも掘つて入れば寒さは凌げるだらう。』など、福山【義善】校長先生も非常に心配して呉れた。籠城準備の兵糧等も色々研究した結果、餅や鯛【すめ】や、鯉節などを銘々用意することにした。猿が出るかも知れぬといふので猟銃まで持つて行くことにした。

土曜の午後筑波嵐【おろし】がビュー／＼と吹き捲くる北条街道【筑波街道】を同勢廿四人、石川先生に率ゐられて筑波を指して駆け出した。冬の日脚【ひあし】は非常に早く筑波の町に辿り着いたのは黄昏時だった。一応土地の警官に了解を求める必要があらうと早速駐在所へ罷り出た。

「飛んでもない考へ違へだ。この大寒の真最中に山頂などに泊れるものでない、尚更夜中の登山などとは以ての外、若【も】しものことがあつたらどうなさる。俺も責任上困るから、そんな無謀のことは思ひ止まつたがよい。」

警官に散々きめつけられて了つた。

「何? 構ふものか、これしきの登山に怖気【おじけ】づいたとあつては、日東【にっとう】日本国の別称【男児の面目にもかゝる、行けく。】」

注1) 五軒茶屋

ケールカカー筑波山頂駅がある平坦地は、男体山・女体山の二神が御幸(往来)する「御幸ヶ原」と呼ばれ、当時そこには、依雲亭・迎客亭・遊仙亭・向月亭・放眼亭の5軒の茶屋があり、夫婦餅(ふうふうもち)や田楽豆腐を販売していた。

注2) 賛助会員

【進修会】は、通常会員(生徒)、特別会員(教職員、賛助会員(元教職員、卒業生)で組織されていた。

警官は、登山は止めましたが、持参の猟銃については何も言っていない。当時、刀剣類については、廃刀令【1876〔明治9〕年太政官布告第38号】により、勤務中の軍人・警察官以外の帯刀は禁止されていたが、銃砲類の所持は、1910〔明治43〕年の「銃砲火薬類取締法」(銃砲類の製造・市販は政府への登録制とし、また許可無所持することを禁止した)の施行まで、規制がありませんでした。それにしても、猟銃を持ち歩いている中学生に一言の注意も無いのは、首を傾げてしまいます。が、「これしきの登山に怖気づいたとあつては、日東男児の面目にもかゝると、意気盛んな土中生でも、筑波山の猿は怖かつたのでしよう。」

「厚意的に忠告してくれた警官の言葉も、血気に逸る我等にとつては馬の耳に念仏だった。用意の松明に落葉堆【うずたか】き細路を照らしつゝ、勇ましい軍歌に元氣をつけて登つて行く。斑【まだ】らな星の光りは寒天に凍つていつてゐる。夜の登山! 成る程警官の忠告通り今更のやうに危険を感じた。樹の根、岩角に腕【ひざまず】踏つまずくの誤植か【くやら、おまけに一步を踏み外せば千仞の谷底だ。真の闇路を照らす生命の綱の松明! それももう無くなるにかけて心細いこと限りなし。夜は次第に更けて軍歌の声も力なくなつて来た。その中突然あたりの静寂を破つて消魂【けたたま】しい一大音響! 素破【すわ

突然の出来事に驚いて発する語。あつ)何事ぞと上を下への大騒ぎ。これぞ石川先生が後生大事と自身に背負はれてゐた、風呂敷包の中から一升罌詰【たんづめ 酒がめ】が転がり出したのであつた。岩にブツかつて石塊の上をゴロゴロと落下したのであつたが、天運なる哉罌詰は幸ひ亀裂さへ出来てゐなかつた。頂上へ着いてからの祝杯にするのだと初めて知つた。我等は『ベ【しめ】たく』と無性に喜ぶ石川先生を囲んで万歳くを絶叫した。」

筑波山頂で祝杯を挙げるために生徒を誘うとは、なるほど豪放磊落です。岩の上を転がり落ちた酒がめは、どこの焼き物だったのでしようか。その強度には驚くばかりです。一升罌詰はさぞ重かつたと思ひますが、酒好きの石川先生、大事な酒がめを生徒に背負わせて、割られてもしたら取り返しがつかないと思ひ、自分で背負われたのでしよう。酒がめの無事を喜ぶ石川先生を囲んで、万歳を絶叫する生徒たち、実に純朴です。

「思はぬ喜劇に元氣を恢復し燐寸【マッチ】をつけては其の明りを頼りに二三歩づゝ心許【こころもと】ない山路を辿つた。」

『もう大分登つて来たぞ、熊笹があるから五軒茶屋はすぐ近い筈だ』
「オーイ」と大音あげて口々に呼んで見たが先発隊から何の応答もない、合図の銃声もまだ聞えて来ないハテ不思議! 先発隊が迷児になつたのかしら……と、

だしぬけに左手の谷底から人声が聞えて来た、耳を澄ませば正しく一味の連中だ。何処【どこ】を何【ど】う迂路【うろ】ついたものか闇路に迷つた一行二名岩にかぢりつき草木をわけ乍【なが】ら夢中で逼【は】ひ上つて来た。すると、其中の一名は安堵と疲労の為めに其場



明治期の夏の五軒茶屋(上)

夏季以外は、周囲に雨戸が付設された石川重房先生(「進修」第8号)(円内)



にドツと倒れて了つた。さあ困つた。只さへ【ただでさえ】弱り抜いてゐるこの場合、急病人を抱え込んだのだから二進も三進も【にっちもさっちも】始末に了へぬ。さればと云つて此のまゝかうして途方にくれてゐたのでは仕方がない。一刻も早く山頂をきわめた上で迎へに来るのが良策だらうとあつて、病人は石川先生に介抱を頼み、我等は勇気を百倍して山頂へと、へびー【和製英語 last heavy 最後のがんばり】最後の努力の heavy をかけた。

登つて見れば何の事だ五軒茶屋はすぐ頭の上だつたのだ。茅葺小屋の中には先発の連中が、生木をウンと積み重ね焚火に濛々【もうもう】たる煙をあげつゝ悠然と納まつてゐたのだ。雪は四辺を埋めて而かも氷のやう【様】夜の十時過ぎだつたらう、闇夜を裂く号砲一発！ 山頂を揺がす万歳の声！ 大自然を制服【征服の誤植】した誇りと意気に燃ゆる吾等は宛【さながら】常勝軍の気持になつて何んとも謂へぬ愉快さを感じた。早速石川先生を迎へて来て胴上げにした。幸ひ案じた病人も活【いきかえ】つてゐたので一同非常に喜んだ。」

危うく、警官の忠告どおりになるところでしたが、何とか無事に五軒茶屋に着きました。胴上げまでされた石川先生は、生徒たちの敬慕的であつたようです。1928【昭和3】年4月発行『進修第27号』に、水戸中学校教諭富岡良夫(中3回)は、「母校創立当初の思出」と題して、石川先生のことを次のように記しています。

「……何と言つても、超越的気分が充満して、辺幅を飾らず、遠視眼鏡を鼻の先きへ、チョンビリかけては、眼鏡越し物を見る癖があり、殊に滑稽味を懐かしめるぐらゐに、生徒の帽子と同様の海軍帽を必ず横ざまに被つて、東真鍋の高台からトボくと通はれたお方に石川重房先生があつた。殊に先生の特徴は国語の解

釈法に存する。即ち、重房五段の講義てふ【といふ】の魁……という【名称さへ】ついてゐて、序、大意、語釈、本講、余波の形式を履まぬと御機嫌めでたくないといふ調子である。尚、先生が数学に長じてをられたのは不可思議と思はれる位である。惜しいかな、本年春三月老病で逝去せられ、その追悼会を当【水戸】市外谷中本行寺で催はした。私も母校側を代表して列席したのであつた。……」

「先発隊の伐採した生木や棚にあつた薪を惜気もなく焚きながら、大きな炉を囲んで餅を焼き、鯛を焙つて盛んにパクついた。石川先生は一杯機嫌で盛んに気焰をあげる。

午前零時近しと思ふ頃表【表戸】に方【むか】つて『開けるく』と怒鳴る奴がある。曲者御参と部屋中俄かに緊張し、早くも銃口は向けられた。『誰れだ?』『誰でもよいから早く開けて呉れ』『名乗らぬ以上は開けられぬ』権幕はなかく凄【こ】かつた。

『俺はこの家の主人だ』『何に主人だ?』

此家の主人と聞いて吾等は開いた口が塞がらなかつた。そして此の真夜中に一体何用あつて来たのだらう? とは吾等の頭に浮んだ大なる謎であつたのだ。主人と聞いて開けぬ訳にも行かず、洩々表の茅戸を開くと大荷物を背負つて七八才位の男の子を連れた田舎親爺がツクネンと立つてゐた。聞けば利欲に抜目のない此家の主人は、吾等一行の此の宿借りを耳にして、早速名物の田楽を仕込み一儲けしやうと危険を冒して、態々【わざわざ】遣つて来たのだと云ふ事實が判つたのだ。」

警官の忠告も聞かずに登山を強行する先生も土中生も褒められたものではあませんが、その後を追つて登つてきた茶

屋の主人も、相当なものです。総勢25名ですから、商売になると考えたのでしよう。一緒に来た男の子は、普段から親爺の手伝いをして、山を上り下りしてゐると思われまゝ。しかし、普段ならば寝てゐる時間なのに、付いて来たのは、中学生が物珍しかったからなのでしょうか。

「丑満【丑三つ】およそ今の午前2時から2時半【から】夜明にかけて山頂の寒さは又格別だ。物を食べてゐる間だけが辛うじて寒さを忘れ得るに過ぎない。全く以て想像以上だ。薄ッペラな外套一枚にくるまつた位ではまるで背骨が裂けるやうだ。焚火に向つて半面は暖かいが背の半面は骨肉が離れく【に】されるやうだ。四五人づゝ重り合つて見たが一番の上積は貧乏籤で、とても寒さの為に辛抱出来なかつた。火にあてた握飯は粥のやうにドロク【に】溶けて口に入れられたものでない。一晚中田楽や餅や鯛をパクつき口を不断に動かし乍ら厳寒と戦ひ、殆んど一睡もせず夜に夜に白むを待つて戸外に飛出し雪中の角力【すもう相撲】をオツ始めて辛くも寒さを忘れ得た。

筑波の「お下り【おさがり】」【注3】に焚く大事な木だといふのを只の薪と心得違ひして、無意識に夜中焚きつくして宿の主人に散々泣き言を濡【濡(こぼす)の誤植】され、一晚中生木に燻【くすぶ】つた真黒な顔を洗ふことも出来ず、女体山で麗らかな御来光を拝し、裏山通ひ【伝ひ】に下山して柿岡に出た。麓の村民等は印度の黒ん坊かと怪訝【げげん】な顔をして、吾等を覗き込むやうにして見た。

あゝ、五軒茶屋の一夜! 実に寒かつた、心底から寒かつた。あの一夜の体験は廿数年後の今日でもまさしくと印象づけられてゐる。恐らく僕の一生を通じて忘れ得ないであらう。

僕等の中学時代にはクラスの旅行会が組織してあつて、一学期の間に二回

づゝ心身鍛練の爲めにかうした旅行をしたものだ。苦しい事もあるが、痛快味もあり、趣味もある。よくあんな事をしたものだと思ひ出してはぞつとすることもある。併し自分は人生の行路に於て此種の旅行が有形に無形に、尠【すく】なからぬ利益を与ふるものであると云ふ事を、如実に体験した一人である。(二、五、一一)【昭和2年5月11日】」

【注3】筑波の「お下り」御座替祭(おさがり)は、筑波山神社で、現在、4月1日と11月1日に行われる神事。4月に親神が里に下つて子神が山に登り、11月にはその逆になる。地域住民は「おさがり」と言うので、「おさがり」と聞こえたのだらう。

土中生たちの登山は、正月休みも終えた1月中旬の土曜日【警官は「大寒の真最中」と言つていますが、とありますから、1902【明治35】年の1月11日(土)から12日(日)或いは18日(土)から19日(日)に掛けて強行されたものと思われまゝ。

その同じ月の20日から、弘前歩兵第31連隊37名が、23日からは、青森歩兵第5連隊210名が、寒地作戦の訓練の一環として、八甲田山雪中行軍にそれぞれ出發しました。第31連隊は、十分な準備の上で、実施し、全員が無事に帰營したのに対し、第5連隊は、雪に対する経験・知識が足りず、防寒・防雪への装備も不十分だったことから、210名中199名もが死亡するといふ、世界山岳遭難史上最大の、いわゆる「八甲田山遭難事件」の惨事となりました。土中生たちも、雪に降り込められていたら、第5連隊の兵士たちと同じ運命を辿つていたかもしれませぬ。

この八甲田山雪中行軍遭難事件を題材に、新田次郎は、『八甲田山死の彷徨』(1971【昭和46】年に新潮社より刊行)を執筆しました。1977年には、『八甲田山』のタイトルで映画化もされています。

アカンサス 169号 筑波山登山コース

筑波山塊地図

(明治44年発行 一部修正)

筑波山名所絵図(下)

